幼児教育の質の向上を求めて
～子どもの学びの物語を保護者と共有し、協働する～

加藤　篤彦
武蔵野東第一・第二幼稚園 園長

1．はじめに

近年、乳幼児が自ら外の世界に主体的にかかわって、能動的に学んでいるという研究成果が多くの方々に広く紹介されるようになった。また、経済学者からも幼児期からの教育投資の優位性が指摘（*1）され、OECDにおいても幼児教育の重要性（*2）が共有されるようになった。

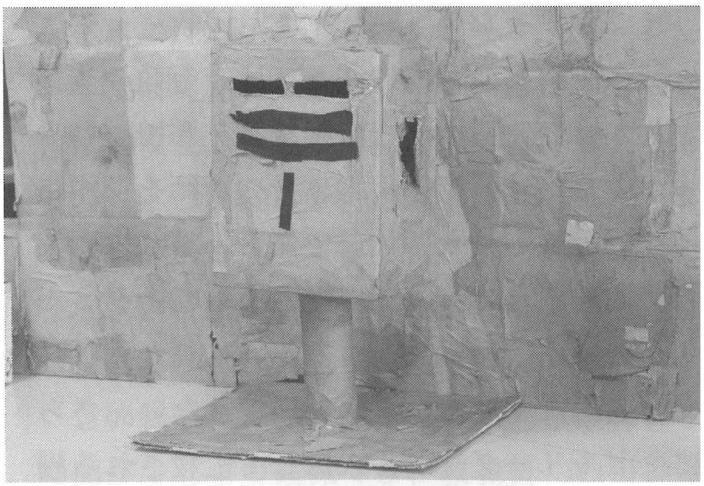
この春に告示される幼稚園教育要領の改訂においても、中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会の審議のまとめ（2016/10）には、「子供たちが『どのように学ぶか』に着目して、学びの質を高めていくためには、『学び』の本質として重要となる『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した『アクティブ・ラーニング』の視点から、授業改善の取組を活性化していくことが必要」と記述されている。また、改訂においては、育成すべき資質・能力の三つの柱として「学びに向かう力」についても言及されている。

本園では毎年、教育重点を設定して保育を行っているが、平成26年度から「子どもの学びの物語を保護者と共有する」をテーマとして取り組んできた。具体的には園児の姿を画像で記録して、その折々に何が育っているのか、育とうとしているのかをドキュメントシートにまとめ、この情報から保護者と子どもの学びを共有してきた。年次を繰り返す中で、記録を時系列で整理して、つまり点をつなげて線にして、園児の活動が、どのように積み重なっていくかにも着目するようになってきた。幼児教育は教科書がないこともあって、保護者にも分かりにくい営みである。プロセスを線として可視化することによって、保護者との情報共有は保育への関わりを促すものにも変化してきている。

この度の機会を得て、年長５歳児の教育実践を「学びに向かう力」の育成という視点からまとめさせていただく。

2．ひとつのポストの物語（年長５歳児10月）

本園では11月に「園まつり」という行事があり、造形作品を展示している。９月からクラスの皆で何を作るかを話し合う。その中でポストを作りたいというアイデアが出て、賛同する友達がグループになって作ることになった。



【完成したポスト。このポストを見ただけではもちろん学びのプロセスは見えてこない】

共同製作は、完成したイメージを共有するための設計図描きから始まる。図鑑や絵本を見て、相談しながら、絵を描き上げる。

そして大きな太い紙の筒と、本体の大きな段ボールを見つけ出してきて製作が始まった。

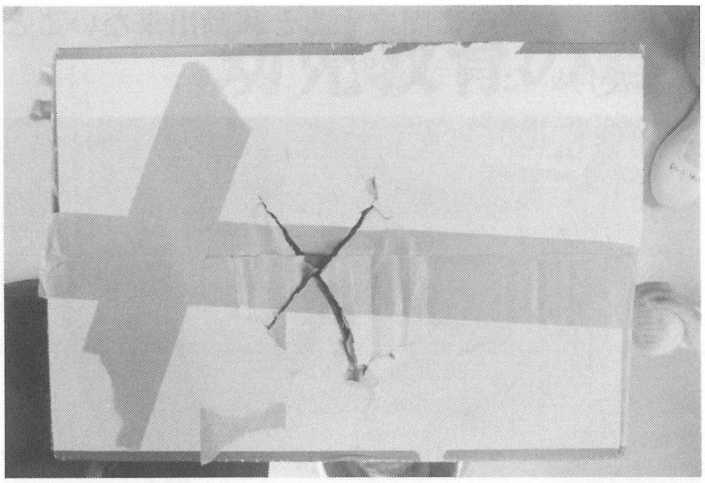
まず手紙の差し込みの口を開けた後、紙筒に載せてみる。しかし、傾いてしまう。まず箱を支える紙筒が安定していないので、紙筒の固定が必要だとクラフトテープで床に貼り付ける。

ところが、床に固定すると移動出来ないことに気が付いた。

そこで、床の代わりとなる段ボールに固定して一安心。しかし、支柱が安定しても上に載せる段ボールがぐらぐらする。

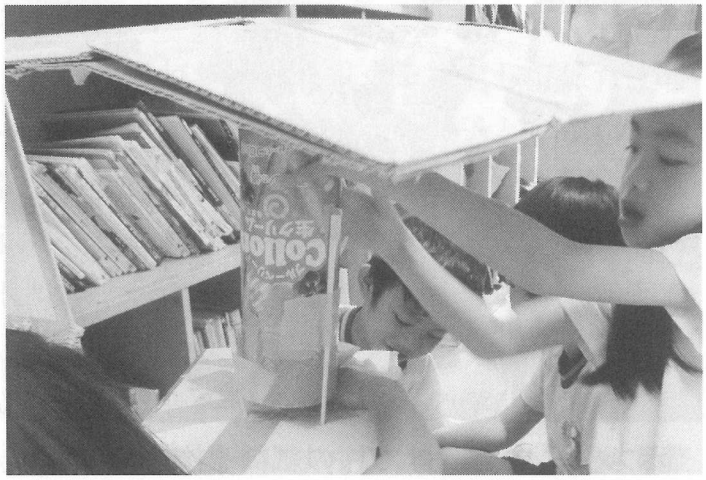
困った時にはクラスの会で皆に相談する。

ポストに穴を開けて柱の紙筒を突き刺せばよいというアイデアが出たので試みる。

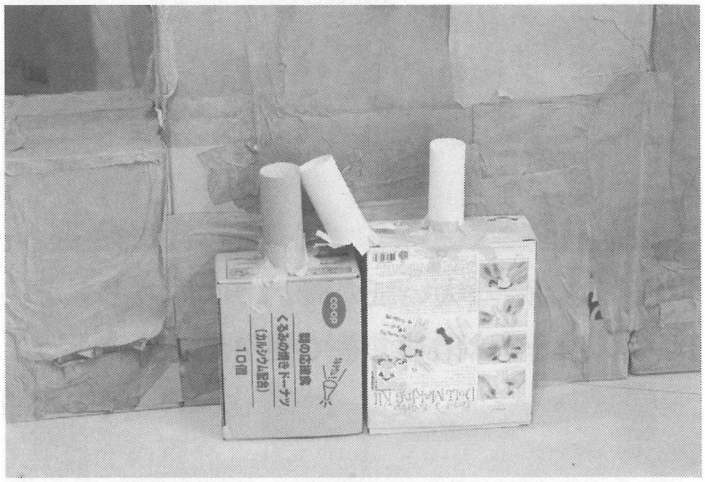


×に切れ目を入れて支柱を差し込むが安定しない。次のアイデアは、ラップの芯を周りに立てて、いくつもの柱で支える方法。安定はしたが、ポストの柱は１本しかないとの意見が出て、これは取りやめとなった。

次のアイデアは、筒の周りから割り箸をいくつも突き出して本体の段ボールに刺す方法。試みた結果、これも安定しない。



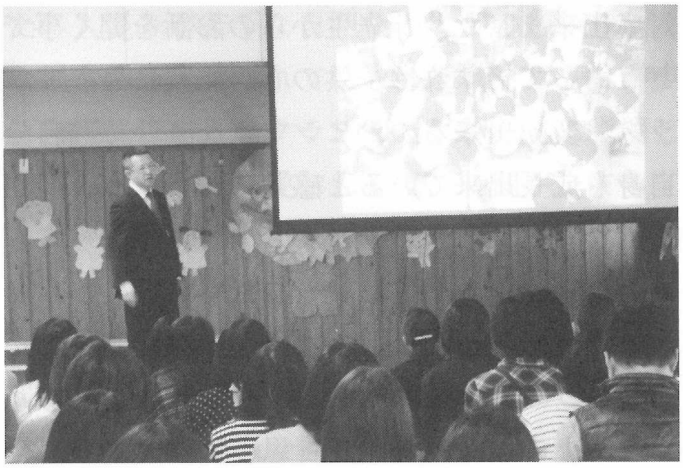
どうしても作りたいポストに向かって、園児同士が協力して取り組み続けた。最終的には柱となる紙筒の両サイドにはさみを入れて筒を開いて段ボールに固定する方法を考え出し、安定した接着ができた。（下図はトイレットペーパーに切り込みをして作った試作版と、実際に布テープで貼っているところ）



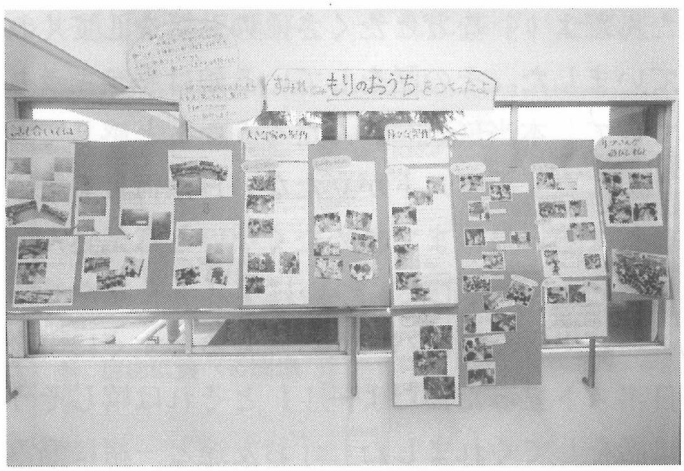
年長児達は、自分自身の中にある体験から得られた既知の事柄同士をつなぎ合わせて、さらにこうすれば出来るかもしれないと仮説を立てて取り組んでいた。同時に年長児同士の間でもさかんに意見交換されアイデアが行き交っていた。完成に向かうプロセスの中には、どうしても作り上げたいという意欲を根底にして、多様な試行錯誤が繰り返されており、それは「学びに向かう力」として捉えられる。

この試行錯誤の繰り返しは、「園まつり」行事

の当日にプロセスを担任がまとめて掲示をしてきたが、今年度はこの行事が始まる２週間前に保護者会を設定して、現在進行形での園児の取り組みの姿を伝えるようにした。プロセスを直接に保護者に説明することで、幼児理解や幼児期の「学びに向かう力」についての理解にもつながっていくだろうと考えたからである。

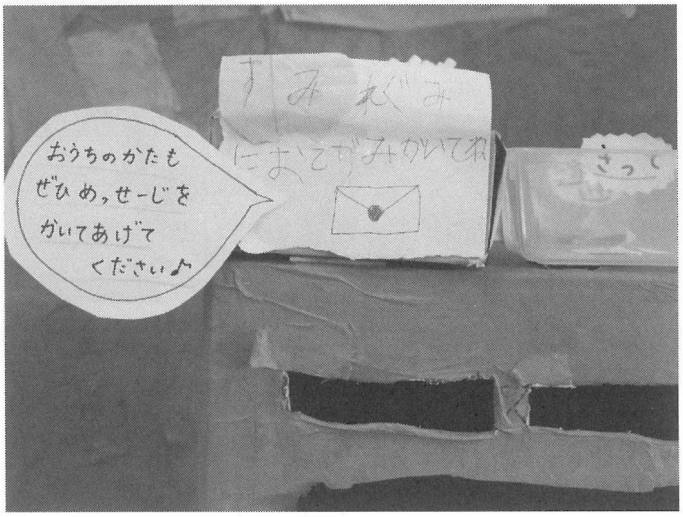


（上：保護者会　下：当日の担任のまとめ）

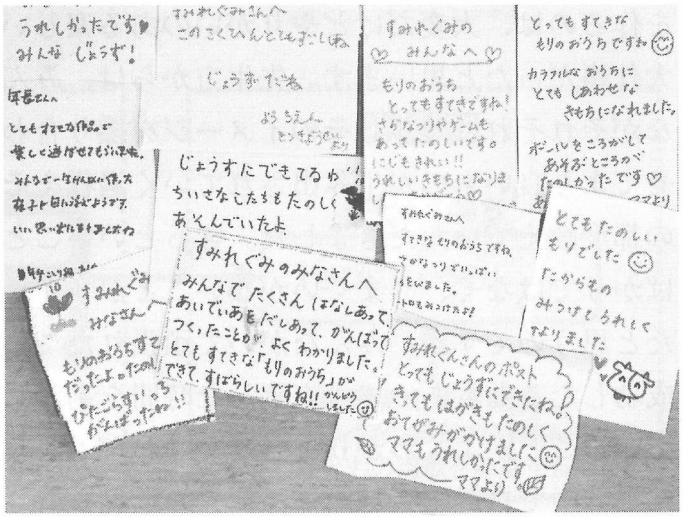


そして迎えた園まつりの当日。ポストが展示されている。

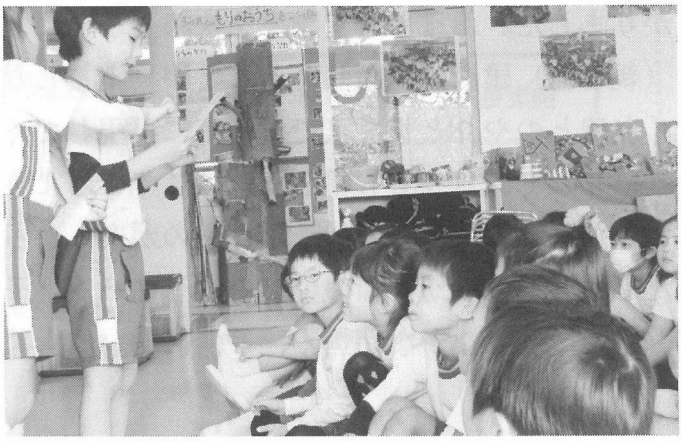
近づいてみると、ポストの上に園児が作ったはがきが置いてある。そして、園児と担任から、それぞれの言葉で、「メッセージをどうぞ」と。



多くのメッセージをいただく。園まつり後に、クラスの皆でポストを開けてみたら、自分のクラスの保護者の方のみならず、他学年の保護者や卒園生からもメッセージが届いていた。



クラスの皆の前で、手紙を読み上げる。



年長児の表情からは、自分達が確かに取り組んできたという実感の上に、多くの皆様からのメッセージをいただいたことで、さらに自己肯定感が育っていることが分かる。

3. 保護者から寄せられた感想から

園まつりを終えて、私達にも多くの保護者からの感想が届いたので、抜粋して記載する。

「何もないところから、あれだけ大きな作品を作るのは、大変だけどやりがいのある楽しい大仕事だったと思います。先生方からは、みんながそれぞれに着想しそのイメージを擦り合わせてより良いものが生み出されていく過程をその都度教えていただきました。きっといいことばかりではなく、うまくいかないことが多かったと思うのですが、みんながいて頑張れたこと、成功したこともあって、充実した時間を過ごしていることがよくわかりました」「わが子がみんなの中で自己主張したり、他人の意見を取り入れたり、力を合わせることができることがわかりました。おうちでも物事を決めるときに、（親子で）建設的に話し合うことが増えました」「友達とのやりとりを家で自慢気に再現してくれたりして、自分でも手応えを感じているようでした。私は毎日その様子を見るのが楽しかったです」「普段幼稚園の中で過ごしている様子を見る機会はなかなか無く、子供に聞いても思うような答えが返ってこない事が多いのですが、園からの情報提供によって子供への対応が取りやすくなりました。具体的には、どういう経緯で製作をしているのか、どういった思いがあるのかを知る事により、園祭り後に持って帰って来た作品の一部も『ゴミを持って帰ってきた』ではなく『宝物なんだな』と大らかな気持ちで対応出来ました」「先生からのお話を聞く事で、どうやって接すれば子供の心の成長にとってプラスに変換出来るのかヒントになり、毎回自分自身も成長出来ていると感じています」「今回の園祭りでは、家でも『ポストがどうやっても立たないんだよね～、ど～したらいいのかみんなで考えてるんだけど、なかなか立たないんだよね～、ガムテープで貼ったりしても倒れちゃうし、上の箱が重いんだと思うんだよね～』『今日はね、手紙をとり出せるように横に穴をあけたんだよ！』などとたくさんのお話をしてくれていました。その話をしている娘はキラキラしていて、本当に楽しいんだろうなぁと感じておりました」「ポストが立たない日は何日も続きましたが、最後まで諦めたくないと意気込んでいました！　そして、ついにポストを立たせることが出来た日、バスから降りるとすぐに『今日ポスト立ったんだよー！』とそれは嬉しそうに話をしてくれました」「お友達と一緒に悩み考えている姿、クラスのみんなにアイディアを聞いている姿を写真で見せていただき、娘が家で嬉しそうに話をしてくれていたことに繋がり、大変感動致しました」「ある日 自閉症の兄がとても大切にしている絵本を資料にしたいからと、なかなかコミュニケーションのなりたたない兄に一生懸命貸してくれるよう交渉していました。言葉も巧みではない娘は、いつもなら兄の反応に苛立って 諦めたり 怒って喧嘩をふっかける

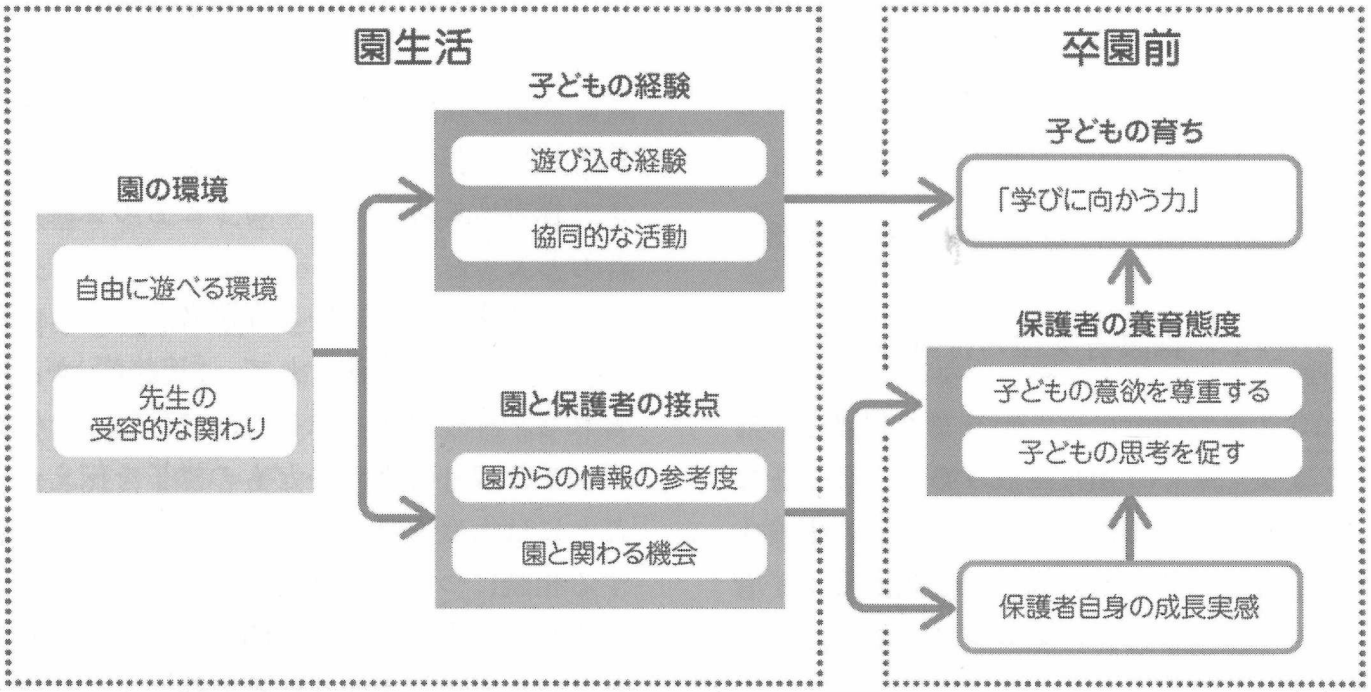
のですが、この日ばかりは　拙い言葉を尽くして一生懸命交渉していました。怒らずに。よほどお友達にこの絵本を見せたい、皆の役に立ちたい、皆で素敵な物を作るんだという気持ちに溢れていたのだと思います。いつもの自分を抑えてお願いしていた娘に　大きな成長を感じました」「園まつり翌日の展示日に再度訪れました。人混みが苦手な自閉症の兄がのんびり色んな展示物を見て触れて世界観を堪能し、妹が少し自慢気に自分のクラスの展示物を兄に説明している様が本当に愛おしくて、時間が止まってくれればいいのに、と思ってしまいました」

4. まとめ

幼児教育は、総合的な環境を通して行うが故に、子どもの育ちの営みを可視化することは難しいが、一方で、今回の事例のように行事の目標と育ちの姿を伝えることで、園と家庭の間での共通した幼児理解と、それに基づいた家庭との連携の大切さを、私自身も再自覚できた。

教育は、子どもを真ん中にして、互いに協働する営みが重要であり、そのためには、単に保育することのみならず、家庭との情報の共有を丁寧に行うことが重要である。

幼児教育の質が問われる時代である。8月末にはベネッセ教育総合研究所から「園での経験と幼児の成長に関する調査」が発表されたが、記載されている図は、まさに幼児教育における保育実践と家庭との関係が明示されたものである。園と幼稚園の接点として、「情報の参考度」という項目があるが、保護者にとっては、単なる事実の伝達ではなく、幼児の成長に資する情報として、その質の高さもまた求められている。それは幼児の理解から始まる保育とともに、幼稚園に勤める者一人一人の質の高さに比する。今後も園全体で、真摯に取り組んでいきたい。



「園での経験と幼児の成長に関する調査」　　ベネッセ教育総合研究所（2016/08）より

(*1) Heckman and Masterov（2007）　"The Productivity Argument for Investing in Young Children"
(*2) OECD「Starting Strong Ⅲ」保育（ECEC＝Early Childhood Education and Care）が幅広い恩恵をもたらす（OECD 2012/9）